

3 日目にレンタカーを借りて、本格的な弥次喜多道中が始まりました。友人は太宰治の生家「斜陽館」と「恐山」を見てみたいと言うご希望。その他は全て私に丸投げすることでした。「斜陽館」は五所川原市にあります。私にとって、五所川原と言えば、五所川原教会。父が戦後、五所川原教会に赴任し、最初の受洗者が青年の祐太郎さんでした。祐太郎さんは教会や地域のために献身的に活動され、ご夫妻揃って叙勲、褒賞を受けました。私が訪問したいとお伝えすると、喜んで待っているとのことでした。



弘前学院の同級生が「出発する前に短時間でもいいから家に寄ってね」と招いてくれました。彼女の家では 3 人が待っていました。トモちゃん、カズコさん、ナッチャンです。前日のクラス会に続いて、またも、旧友との温かいひと時でした。皆さん、美味しいものを持ち寄ってくれていました。トモちゃんが手作りのケーキ、栗ご飯の御膳を用意していました。

津軽衆は御馳走するとなると、トコトン御馳走してくれます。美味しいランチを頂きながら、地元の同級生の消息、教会の様子を聞きました。自分たちの加齢に伴う難儀を乗り切る工夫を話し合います。昔の繁華街はシャッター街に、空き家も多いと言います。人口減少ですが、地元ならではの人の濃さ、狭い世間があります。その中で、彼女たちはさまざまな活動を積極的に担っていました。ナッチャンは憲法 9 条の会の世話人でした。異邦人となって都会近辺に住む私は、サバサバと、自分勝手に暮らしているなあと、感じてしまいました。アツと言う間に時間が過ぎ、友情に感謝し、「本当に、有難う。また会いましょうね」と名残惜しくも 1 時半にお別れとなりました。

やっと五所川原へ向かいます。ついスピードが出ます。赤く色づいたリンゴの畑の中を走り、ついに田圃が広がってきました。五所川原は田圃の中の風の町です。遠くの岩木山は姿を変えています。昔の面影はなく、平凡な、だだっ広い町になっていました。2 時頃に到着しました。

89 歳とは思えないハンサムで優しい祐太郎さんが自転車で出迎えてくれました。ご自宅で奥さんの蘭子さんともしばし歓談。仲睦まじいお二人は教会に固く繋がり、教会を支えて、奉仕し、とても幸せなファミリーに成長しています。私の両親を懐かしがってくれました。

そろそろ、友人の希望の「斜陽館」へ行かなければなりません。どこまでも広がる津軽平野の中に敷かれた新しい広い道路を走りました。祐太郎さんは「牧師先生が伝道地に自転車や徒歩で通った道だよ」とあちこちを何度も指さしながら教えてくれます。やはり五所川原は私のふるさとだと心が震えるのを感じながら、津軽の大地を走りました。



「斜陽館」は金木町にあります。近隣の家とは違い、桁外れに大きい商家の佇まいの建物です。地主が、米の流通、金融をにぎった結果、このように金満の家になったのでしょう。また、貴族院議員もしたとのことで、貴族趣味の華やかさがあります。贅を凝らしていながら、機能性は確保しています。地主が政治にも商売にも力を持つようになったので、このような家が出来たのでしょう。

地主だったという友人たちの家に遊びに行ったことがありました。ともかくみな、豪勢でした。今も貧しく、出稼ぎする津軽の庶民は、地主とは大違いです。太宰治は異様に大きい、この家で大勢の家族と暮らし、悶々としながら、言葉への感性を養われていったのでしょうか。